

森
与
志
男

河は流れる

上



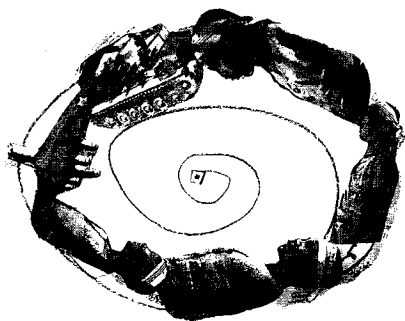
新日本出版社

森 与志男
河は流れる

上

江苏工业学院图书馆
藏书章

新日本出版社



森 与志男 (もり よしお)

1930年生まれ

日本民主主義文学同盟常任幹事

主な著書「荒地の旅」「傷だらけの足」「時の谷間」

「炎の暦」

河は流れる 上巻

1991年9月25日 初 版 ©

著 者 森 与 志 男

発行者 山 本 功

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-25-6

発行所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電 話 東京 (3423) 8402 (営業)
(3423) 9323 (編集)

振替番号 東京 3 - 1 3 6 8 1

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-02009-8 C0093

Printed in Japan

河は流れる

上

目次

窪地

5

少国民

54

幽霊家族

128

総動員

198

カバー・扉装画
伊左次章子

河は流れる

上

窪地

一

蔣田竜一は小学校の教員である。いや、正確には、国民学校訓導というべきであろう。昭和十六年（一九四一年）に国民学校令が施行され、それまでの尋常高等小学校は、国民学校になったからだ。しかし、人々から表向きは、先生と敬称でよばれていながら、その実、世間知らずの貧乏人とさげすまれている社会の下積みの身分であることには一向変わりはなかった。教育制度を大幅に変えた政府は、国民学校訓導の俸給を最低七十五円にすると言明したが、それは三年も先のことであり、しかも在職五年以下の教員は再教育した上でのことだということから、当分この貧窮から脱却できそうになかった。

蔣田竜一の住んでいるところは、六畳と四畳半の二間きりの棟割り長屋である。崖下のなかば朽ちた借家だから家賃はいたって安いのだが、それでも薄給の竜一にとって一人で払える額ではなく、周旋屋から紹介された男と共同生活を余儀なくされている。

彼の住んでいる長屋の一角を町の人々は、「三百番地」と軽蔑をこめて呼んでいた。というのは、そこは、摺り鉢の底のような窪地にあって、一年中陽の差すことのない、いわゆるドブ板長屋で、芝浦の沖仲士とか、露店商人とか、いい方で職人や工場の職工といった人たちが、糞壺の臭いのなかで

暮らしているからだ。

西側はコンクリートの高い壁が塞ぎ、北側は製薬会社の社宅のある高台である。東側はこのあたり一帯の地主の邸宅が大きな森林となつて朝日をさえぎっている。となると、あとは南側ということになるのだが、そこもN街道の旧道が、登り坂となつて走っているから、街道沿いの商店の裏手となつて日照は完全に断たれていた。もっともその旧道からは、まるで梯子をおろしたような急な坂道があつて、窪地の住人たちの唯一の出入り口となつている。彼らはそこから外界に働きに出て、日没後疲れた足どりで三々五々帰ってくるのであつた。

「まったくここはくそだめだなあ」

と蔦田竜一のお居人は吐き捨てるようにいう。たしかに、一年中湿気がたかく、夏場ときたら、一日中汗をたらたらと流さずにおれない蒸し暑さだ。冬はまた冬で、日中でも地面の氷がとけず、身体の芯まで凍りつくような寒さである。ただ、そんななかでも、子供たちは喚声をあげながら迷路のような路地を走りまわり、それを叱るかみさんたちの声が、それこそ糞溜めの銀蠅のような唸り声となつて窪地をおおっているのだつた。

竜一のお居人は、寄居武夫という二十二歳の男である。東亜製作所の人事課に勤務している。いかにも虚弱そうな薄い胸をした陰気な青年で、血色の悪い顔には、両目だけが異様な熱っぽさで輝いていた。普段は無口な方だが、話に興がのると、まるで、息をつくのもどこかしうに話すのであつた。この寄居は、竜一よりもさらに懐具合が悪く、したがって四畳半の方を甘んじて自分の部屋としていた。

竜一の隣には、永井照夫という男が女房と三人の子供と住んでいる。定職がないらしく月のうち二十日ぐらゐは留守で、大柄で四角い肩をそびやかした女房が、四六時中、咳をしたり、子供を叱つたりして暮らしている。同居人の寄居武夫の聞き込んできた話によると、永井は勤めていた会社をしく

じって首にされ、今はブローカーのようなことをしているということだった。

二

永井照夫は、小柄だが目付きの鋭い敏捷そうな男で、世の中そのものになにやら怨念をもっているような開き直った生き方をしている。しかし、どういうわけか竜一たちのところには、ときたま旅先の土産などを持って話にくるのだった。

このノミの夫婦とでもいうべき変わり者の亭主と男勝りの女房は、夫婦仲はきわめてよく、永井が在宅の時は女房はその四角い顔に薄化粧をして、夜ともなれば子供たちを、隣家、つまり竜一たちのところに遊びに寄越すのである。これはきわめて迷惑なことであったが、隣人という手前もあり、また永井の長女夏子がこの四月から彼の学校に入学するということもあってむげに断れなかった。

この長屋の便所は、二軒共同使用になっている。便所に入ったら、まず相手側の戸に棧をさすことを忘れてはならない。そして用を済ましたら、棧を引いて出る。ときたま懸け放しで出ることがあっても、壁を叩けばすぐ意が通じるので困ることはなかった。昔は、近郊の農家のものがこの天然の肥料を汲みにきたらしいが、汲取り料がいるようになってからは、両家の談合で頭割りにしている。それにしても、便所は直通の通路にもなっていて、子供たちは、表からくることを省くのがしばしばであった。

年が明けて昭和十八年になっていた。開戦以来、大戦果の報に国中がわきかえっていたのが嘘のように、この頃は、新聞やラジオの調子がなんとなく悲壮感をおびている。新聞によると三月十日の陸軍記念日の決戦標語が「撃ちて止まむ」と決定し、東条首相は、貴族院で「勝利を絶対確信する」と言明したという。変な話だ。裏を返せばそんなことを言明しなければならないほど、戦局は悪化し

ているということではないか。しかも、首相は、勝利を確信するといったその同じ口で、国内の結束を紊乱するものあらば、断固として処分すると厳命したそうだ。

「なんのことはない、結束を乱すものがあることを自分で白状したようなもんじゃないか。蒔田さん、戦局もすこしあやしくなってきたね」

と同居人の寄居は、新聞を投げ出すといったものだった。周旋屋の紹介で知り合った仲だが、二人の共同生活もそろそろ二年目に入ろうとしているから気心は知れていて、この頃は警戒抜きでものがあるようになっていた。

戦局がこんなせいか、この春はとくに冷雨が続き、木々の若芽がややのびたものの、桜の蕾はいまだに綻びない。そんな長屋の夜は、暗く、寒く、堪え難く長い。竜一は、灯火が外に洩れるのを恐れて、押入に座り机を運び込んで、本を読んだり、新学期の準備に精を出した。国民学校の発足にともない、国民科、体錬科、実業科などといった科がもうけられはしたもの、なにぶんにもまだ教科書が出来ていない。結局、従来の教科書を使用するのだが新課程表により国民学校の教則並びにその趣旨にそって教育すべしというのだから、ずいぶんと無理な話だった。しかし、これは上からのお達しであり、従わないわけにはいかないが、その辻褄合わせには、随分と神経を使わねばならなかった。

竜一が、仕事に倦み、押入から這い出して煙草をふかしていると、境の唐紙が開いて寄居武夫が首を覗かせた。

「蒔田さん、いいかね」

「ここにいるよ」

竜一は、暗い中で答えた。

「ちょっと、こっちにきてみないか。隣でなにか揉めているぜ」と寄居がいった。そういえば、隣家の方でなにやら人の言い争う声がする。

三

同居人から誘われて竜一は、隣室に入った。入り口に続く四畳半だから、ガラス戸と内側の障子には二重に暗幕を吊っている。一脚の座り机のほかほかにはなにもないから、四畳半でも案外広く感じられる。その机の上のランプの明かりのなかで、寄居は隣家との境の壁に耳を押しつけていた。竜一も同じようにした。すると隣のものが手にとるように聞きとれる。

「なんどいったらわかるんだ」と高圧的な男の声がした。

「いったい、この時局をどう考えているのかね、あんたは」

これは、別の男の声で、前の声より一層恫喝的で、豊か何かを打ったらしく、重い音が響いた。

「そんなふうに脅したって、出られないものは出られないよ。いったい何です、亭主のいない女子供の家に押し掛けてきて、声を張り上げればいうことをきくと思ってるのかね」

そうやり返したのは、隣のかみさんだった。

「出ようという意志があれば出られるはずだ。なあ、そうじゃないかね、おかみさん」

と年配の男らしい別の穏やかな声があった。

「意志はありますよ、町会長さん。でも見てくださいな、この家の有様を。亭主は年中仕事で旅まわりだし、子供はこのとおり大勢だし、食っていくのが精一杯でね、とても近所付き合いの出来る暇などありませんよ」

かみさんの声は、少しも怯んでいなかった。

「わかんない人だね、あんたも。近所付き合いと、防空演習といっしょにされてたまるかい」
そう叫んだ声は、長屋の小宮山のような声だった。

「ボウクウ演習とかなんとかいったって、ていのいい兵隊ごっこじゃないの」

「兵隊ごっこだと」

なにかが壊れる音がした。年配の声がある役^{なだ}にまわっている。

「まあ、そう興奮したら話にもならない。でも、おかみさん、それはいけない。いいかね、町会や隣組の活動に協力するようになってるのは、お上のお達しなんで、あたしたちが勝手にやっているわけじゃないんだ。隣組長さんだって、あんたのところが、もう少し協力してくれていれば、こんなことをいいにこなくとも済むんです。まあ、ここは組長さんの顔をたてて、なんとか円満にやってもえませんかね」

「円満にですって、へ、聞いて呆れるじゃありませんか。大の男が大勢して押し掛けてきて、これじゃ、脅迫も同じことじゃないですか。違いますか、町会長さん」

「脅迫だって」さすが町会長といわれた男の声も怒気を含んで、はじき返すようにいった、「じゃ、おかみさんは、どうでも町会や隣組には協力出来ないというのかね」

「出来ないなんていつてませんよ。させたかったらさせるように、ちゃんと筋をとおしたらどうだ、といってるんですよ」

「ちえ、ああいえばこう、こういえばああ、口の減らないあまだ」

小宮山の声が吐き捨てるようにいった。

「そうですか。わかったよ、おかみさん。しかし、よく考え直しておくんだね。でないと、とんでもない厄介なことになるよ」

年配の声が最後にダメを押すようにいった。

四

町会や隣組の行なう防空演習などにあまり協力的でないのは、なにも隣のかみさんに限ったことではなかった。もともと、三百番地の住民は、毎日の暮らしに追われて喰うことに精一杯だから、演習に駆りだされてバケツリレーなどする暇があったら、内職に精を出すか、明日の労働のために身体を休めるのが先決だと考えている。隣組といったって以前は常会をする広さの場所もなく、表通りの商店主らが回してよこす回覧板を素通りさせるのが関の山で、それすらどこか途中で紛失することしばしばであった。

だから表通りの商店主や工場主や赤星製菓の社員たちは、三百番地の住民を呼ぶのに、「貧民窟」のあとにその頃は「非国民」という三文字をつけくわえたほどであった。

しかし、いまでは、その不名誉な呼び名はある程度返上されている。返上させた一つの力は他にもない警察であった。

ある日、この窪地に警察が手入れを行なった。何者かが警察にこの迷路のような長屋にアカが潜入して、時折集まってはよからぬ陰謀を企んでいると密告したのである。警察が内偵してみると、たしかに密かな集まりがおこなわれている。そこで手入れということになったのだが、捕まったのはアカなどではなく、花札賭博をしていた遊び人や職工であった。

警察としては当て外れだったが、賭博だけでなく、隠匿されていた闇物資も摘発された。なにしろ、この悪の巣窟のような貧民窟には日頃から目を光らせていたところでもあるし、警察に協力を惜しまない町内会の世話役からは、目に余るその非協力ぶりをきかされていたので、この際徹底して追及することとなった。国防への非協力は、アカの手先だというわけである。挙げられた連中は散々油をし

ばられ始末書までとられて、今後は町会の行事にはすすんで協力することを誓わされた。これを聞いた長屋の住人たちも、ぞっとした。みなそれぞれ警察とは関わりを持ちたくない人物である。この際、ある程度協力しておかないとひどいことになると考えたのである。

もう一つは、そしてこれが最大の原因なのだが、町内会、隣組が国の政策によって著しく強化されたためである。

去年の五月に政府は、大政翼賛会を改組して、「国民組織に関する方針」というものを発表した。これは部落会、町内会、隣組などは、あげて翼賛会の指導下におき、世話人において翼賛運動の推進に当たらせるといったものだった。

つまり、町会役員や隣組の組長がみんな翼賛会の世話役、世話人となり、正式にその役職を委嘱されたのである。世はあげて翼賛運動の時代である。翼賛選挙も行なわれて翼賛会推薦の議員は大幅に当選するという時代だ。町内会役員や隣組の組長は、お上からお墨付きを頂いたわけで、この人のいうことを聞かないということは、お上に楯突いたことになる。さすがにしぶとい長屋の住人たちも、首根っ子を押さえられた格好となった。

それからというもの、防空演習や夜警に出るものが次第に増え、隣組の常会も曲がりなりにもたれるようになった。隣家のかみさんにしても、こうした成り行きはある程度わかっているはずなのだが、町会の役員や隣組の組長とこんなやりとりをしている。竜一にはそこが何故か解せないのだった。

五

町内会の世話役たちと隣家の女房とのやりとりがあつてから数日が過ぎた。長屋を見下ろす東側の高台には丹野邸の広大な庭園があつて、楠、樅、檜などの高木が鮮やかな緑の色彩を競いあっている。崖

つぶちには、桜が二十本ほど並んでいるが、今年はまだ花を咲かせていない。この崖下は、丹野家の所有地である三百坪ほどの空地になっているのだが、去年の花の季節には長屋の住人たちの格好の花見の場所になったものだった。だが、今年はたとえ花があったとしても、花見どころではなかった。空地は、雑草が刈り取られて、朝は少年団のラジオ体操と点呼集合の場所、昼は隣組の防空演習、夜は夜警の集合場所になっていた。

蒔田竜一と寄居武夫は、一応一軒借りている手前、町内会や隣組の行事に参加しないわけにはいかなかった。ただ、防空演習など身体を動かすことは、足の不自由な竜一には無理なので寄居が分担し、隣組の常会などには竜一が出るようにしていた。ところが、寄居は月半ばかり出張で家を空けることが多くなり、その分を竜一が被ることになった。

明日は、新学期の職員打ち合せがあるという前夜、竜一たちの棟が夜警の当番にあたった。寄居は例のとおり東北地方に出張している。国民学校高等科を卒業して集団就職する少年や少女を迎えに行くというのがその仕事だった。

竜一が夜警小屋のある空地に行ってみると、左隣り二軒の主人たちがもう来ていて、練炭火鉢をはさんで茶を飲んでいた。小屋の壁には、提灯や拍子木が釘にかけてある。竜一が杖を引きながら小屋の前まで行くと、「やあ、今夜は先生ですか」といって、倉橋留吉が迎えた。彼は小さな電球会社の工員である。

「不自由な足で大丈夫かね」

そういったのは、防空班長の小宮山保男だった。彼はゴム会社の工員だが、在郷軍人でもあるので、長屋では隣組長の一人になっている。

「まあ、中に入って休んでください」

倉橋が如才無く竜一のために場所をあけてくれた。

「あとは問題の永井だが、どうせ来やがらねえだろうな」

「さっき、一応声だけはかけたんですがね、めずらしくおやじがいたけど、やっこさん、べろべろに酔っていやがって話にならない、人に楊枝を吐きかけやがった」

倉橋は小宮山の前では、一段へりくだった態度をとっている。小宮山の勤めているゴム工場は、この界限では赤星製菓に並ぶ大会社で、彼の収入も長屋の住人の内では安定している方だった。しかし、それよりも、例の警察の手入れの一件以来長屋の雰囲気が変わってからというもの、急に軍隊経験のあるものたちが結束を強め、威勢を張りはじめたのである。もともと、あの手入れにしても、どうも在郷軍人会から発破をかけられた小宮山たちが、アカの集まりをデッチあげて警察に通報したのではないかという噂まで陰ではささやかれているのだった。むろん表立ってそんなことは誰も素振りにも見せない。町内会、警防団、隣組のなかに根をはりめぐらして発言力を強めている在郷軍人会の連中に楯突くなど、思いもよらないことだった。

「まったく、腹の立つ野郎だ。永井は、もとは赤星製菓の工員だったがよ、労働争議の片棒をかつぎやがって追い出されたくちさ」と小宮山は、火鉢を股の間に挟んで喋った。浅黒い四角な顔に火鉢の明かりが照り返っている。

六

「片棒をかついだといってたって、どうせ使い走りをしたくらいでしょ」と倉橋がおもねるようにいった。

「まあ、そんなところさ。でもな、ああいう手合いの性根というのは、一生直らないもんだよ。なにしろ、腹の底が腐り切っているんだ。そのどろどろに腐った腹の底からメタンガスのように世の中に